
君と歌えば

もち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と歌えば

【Nコード】

N3806P

【作者名】

もち

【あらすじ】

リノージュには”先生”が居る。

”先生”とは言えども、通う学園の教師でもないし、同じ学園に通う三つ年上の少年だ。

でも、彼は”先生”だった。常識を知識を、そして心を教えてくれたのは彼だった。

魔法ありの学園ファンタジー物語。

0：図書館にて

誰かの話声も歩き回る音もただ遠くに有りて、この静寂に響くは書物をめくる音のみ。

「先生、ひとつ良いですか？」

「ん。なんだリノ？」

手元にある本の文章をそつとなぞる。

「今までに何冊も本を読んできました」

「ああ」

彼のまるで海のような深い碧瞳に、私の鮮やかな翠眼が映る。

「リノ？」

「何が正しくて、何が間違っていたんでしょうか。……知れば知るほど、わからなくなりました」

そうだなあ、と呟く、彼の赤髪がさらりと揺れる様をぼうと見つめれば、彼はひとつ苦笑して私に視線を合わせてきた。

「物事の善し悪しは、結局自分の判断によるものだと言は思っね」

「え？だって、この本を筆頭に……」

私は戸惑う。だって、どの本を見ても、いつだって”悪”だった。

ぼん。

彼の大きな手により、うつかり過去に入りかけた私は引き戻される。

「事実は事実だ。だがな、それが絶対に良いとか悪いとか確実に決められる奴なんて居ないと思っぜ」

彼は、私の頭を撫でながら呟く。

「なあ、リノ」

俯いた私に彼の表情は見えない。自分のキャメル色のくせ毛が、私を守るように景色を隠す。

「俺に聞かせてくれ。お前が聞いた物語の一片を」

少しして、小さな声でした返事がちよつと湿っぽかったなんて気づかなかったよね、先生。

1：よくある一日

「リノージュ、あなた今日もマクベイン家の御子息のところに行つてたんだって？」

「うん。そうだよ」

言葉を返せば、ソフィーの眉間にシワが寄る。

「……色々言いたいことはあるけど、これだけは言わせて！」

勢いよく捕まれた肩が痛むが、射るような視線に気圧されて何も言えない。

「いいい。もしもあなたを脅したり、危害を加えようとする人が来たら、ただちにその場から走り去るのよ！」

今の様な状況だね。

とか、口が裂けても言えない。

何度か同じ問答を繰り返してきて、心配してくれるのは嬉しいんだけど……正直、1番恐ろしいのはソフィーのこんな時だと思う。

まだ何か言いたそうにソフィーが口を開いた時、辺りに荘厳な鐘の音が響いた。

「ソフィー、もう始まっちゃうよ！」

「まったくもう。さっき言ったことわすれないでね！」

今だ眉間にシワが寄っているのは見なかった事にして、次の教室へ向かって駆け出した。

目の前では真法歴史学の講師が相変わらず眠たくなる声で話し続けている。ぼうとした頭にはまったくもって授業内容は入って来ず、ただ右から左に通り返けていくばかりだ。

しかしながら、ひとつだけ頭に引っ掛かる単語があった。

「えー。その結果、アリアラン王国に居たメイル一族は絶滅したとされています」

メイル一族。

その単語が、かつて”先生”と私を引き合わせた言葉であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3806p/>

君と歌えば

2010年12月14日22時13分発行